
序文

米山 裕¹

APUの第3代学長である是永駿先生は、2008年4月にAPU孔子学院長として大学に来られました。先生は大阪外国語大学の最後の学長として、2003年3月から2007年9月までの短い期間に、大阪外国語大学の国立大学法人化、さらには大阪大学との統合という極めて難しい課題・協議をとりまとめ、日本の高等教育における歴史的な変革を成し遂げられたばかりでした。是永先生はAPUにおいても大学運営に尽力してくださり、2009年4月からは副学長、2010年1月から2017年12月まで学長を務められました。

先生の学長時代の2014年に、2000年の「APU開学宣言」を踏まえて、学生、校友、父母、教職員の議論を通じて、2030年にAPUが目指す将来像「APU2030ビジョン」を策定しました。APUは、異なる文化と価値観の違いを認めて理解し合い、自由で平和な世界を築く「世界市民」を育成し、「APUで学んだ人たちが世界を変える」と高らかに謳いました。これは、私たち教職員が常に立ち返るビジョンであり、いま私たちが取り組んでいる中長期計画「APU2030チャレンジデザイン」の基礎となっています。

2025年の世界は、人類の平和からはほど遠いのが現状です。是永先生は、差別、抑圧、暴力がはびこる世界の現状を深く憂えながら、一方でAPUの学生と卒業生に希望を託しておられたと伺っております。是永先生を偲ぶ会において私は、APUが是永先生の志を受け継ぎ、APUで学んだ一人一人が、自由と平和を追求し、人間の尊厳に対する畏敬の念を抱き、世界で、日本で、それぞれの住む地域や立場を越えて、他者と社会のために行動し、世界を変える「世界市民」となる、そのような大学作りに邁進することを先生にお誓い申し上げました。この誓いを、本特集号をご覧になる全ての皆さまと共有したいと思います。

¹ 立命館アジア太平洋大学 学長

はじめに

張 文青¹

故是永駿先生は、大阪外国語大学の教授、そして同大学の最後の学長を務められたのち、2008年4月より本学・立命館アジア太平洋大学（APU）の学長、APU孔子学院学院長および理事長として、その職務を全うされました。是永駿先生の偉大なご功績を讃え、APLJ第10号を是永駿先生追悼号といたしました。

是永先生は、卓越した中国文学研究者でいらっしゃいました。主に、魯迅（Lu Xun）、茅盾（Mao Dun）などの現代小説を研究対象とされ、また現代詩においても、北島（Bei Dao）、芒克（Mang Ke）などの『今天』派詩人を中心に翻訳、研究しておられました。本号は、故是永駿先生のご遺族のご了承を賜り、先生が韓国・東義大学東アジア研究所主催の基調講演会でお使いになった、未発表の講演原稿をはじめ、是永先生と共にお仕事をされてきた多くのご関係の先生方から追悼文や学術論文をご寄稿いただきました。この場をお借りし、編集委員会一同、心より感謝申し上げます。以下に、本追悼号に収録された是永駿元学長のご遺稿、四篇の追悼文、および中国語教育に関する学術論文1本をご紹介します。

まず、是永先生のご遺稿は、日本・中国・韓国における詩的言語と翻訳の意義について論じたものです。是永先生は、韓国東義大学でのご講演で、詩の翻訳は単なる言語の変換ではなく、詩作に等しい創造的な行為であると述べられました。さらに、詩における言語の「等価性」や1930年代の東アジアにおけるモダニズム詩の比較を通して、詩的表現における文化的多様性と共通性に光を当て、越境的な文学交流の可能性を示唆されており、先生の情熱に満ちた講演であったことを思い起こさせる内容です。当日その場にいた参加者に知的な光芒を与えたに違いありません。

金賛會先生の追悼文では、是永先生が日本における中国文学研究の第一人者であると同時に、APUの発展と人間性を重んじる教育に大きく貢献され、APUの国際化にも尽力された人格者であったことが偲ばれています。金先生は、是永先生がAPU退任後もご自身が多言語学習に励んでおられる姿勢に感銘を受け、是永先生の多文化理解を实践された温かく誠実なお人柄は、多くの人の心を動かすものであったことを述べられています。

西川孝次先生の追悼文には、是永先生が退職後、俳句という簡潔ながらも深遠な表現の世界に没頭され、言葉を通して自由で豊かな思考空間を追い求めておられたことが綴られています。是永先生の、詩の力を信じ、言語の本質に迫ろうとするその探究心は、俳号「舜」に込められた理想とも重なり、今なお言語研究の灯をともし続けておられるようだと故人を偲ばれました。

神戸輝夫先生の追悼文では、是永先生との1970年代の交流が懐かしく振り返られ、「物静かな学者、情熱を秘めた文学青年」としてのお姿が今も心に深く残っていることが語られました。

1980年の訪中団に是永先生と共に参加された神戸先生が、報告冊子に書かれた是永先生の詩を紹介してくださったことで、私たちも改めて先生の暖かいお人柄を偲ぶことができます。貴重な作品が広く公開されたことに、是永先生も喜んでいらっしゃるでしょう。

¹ 立命館アジア太平洋大学 孔子学院学院長

田原洋樹先生は、是永先生と共に歩んでこられた教職員代表として、家族葬に参列され、式中に読み上げられた「惜別の辞」を本追悼号にご寄稿くださいました。「惜別の辞」には、是永駿先生への深い感謝と敬意が綴られ、先生の教育や学問への真摯な姿勢、温かいお人柄など、多くの思い出とともに、そのご功績が振り返られています。また、是永先生が掲げておられた「水路を開ける」という教育理念に象徴されるように、学生や教職員の可能性を引き出し続けたそのお姿は、今もなおAPUに息づいていると、是永先生を深く偲ばれています。

前田真砂美先生は、大阪外国語大学（当時）の中国文学の授業で初めて是永先生の聲咳に接し、その後中国語教員としてAPUに赴任された際、学長である是永先生と再会されました。大学時代の授業で、是永先生の、言葉を吟味するようにゆっくりと、ユーモアも交えながら話されるお姿に触れられたことは僥倖でした、とおっしゃっています。前田先生は、追悼として、中国語教育に関する学術論文をご寄稿くださり、現代中国語で使用頻度の高い「程度副詞」について、その程度的意味がどのように生じたのかを語の本来の意味との関係から考察されています。本論文は、中国語における概念化および言語化のメカニズム解明につながるものとして期待されます。

私たちは是永先生を心から深く偲びつつ、APU孔子学院の理事長をご退任された際の記念講演会を思い出します。是永先生は「中国語の世界」という題を掲げ、中国語の音韻の美しさ、漢字や語彙の面白さ、そして家族や友人を大切に思う表現の美しさについて分析・紹介され、「美しい言語の深さをさらに追究しなければならない」と激励のお言葉をくださいました。

是永先生は、日本における中国研究の第一人者として、私たちに多くのことをご伝授くださり、また、その生き方をもって多くのことを示してくださいました。私たちは、先生の温かい眼差しにいつまでも見守られ、励まされながら、APUの言語教育の発展のために邁進していく所存です。是永先生の面影と笑顔は、私たちの心に永遠に刻まれています。是永先生、本当にありがとうございました！



APU孔子学院主催による是永先生ご退任記念講演会（2017年11月22日）

張 文青

東アジア（日本・中国・韓国）の詩的言語

是永 駿

1. 日本での中国文学研究は、大きく古典文学と現代文学に分かれます。

日本では昔から、唐詩や『紅樓夢』、『三国志演義』、『水滸伝』など、中国の古典詩、古典小説が親しまれてきました。研究者も古典の研究者は二千名近くいると思いますが（思想、哲学、文学の学会である日本中国学会の名簿では約二千名）、その中で現代文学の研究者は二百名くらいでしょうか、その中でも現代詩をやる方は少数で、10名から20名くらいではないかと思います。私は、魯迅 Lu Xun、茅盾 Mao Dunなどの現代小説、とりわけ茅盾を主に研究してきましたが、現代詩も北島 Bei Dao、芒克 Mang Keなどの『今天』派詩人を中心に翻訳、研究してきました。1988年に日本で最初に北島の翻訳詩集を出し、1990年に『芒克詩集』で島崎藤村記念歴程賞という文学賞を受賞しました。2009年に北島の日訳詩集の新版を出版し、香港から北島を日本に招待して、東京大学と早稲田大学で朗読と講演の会を開きました。

日本で出版された世界文学関係の事典に『集英社世界文学大事典』がありますが、その事典の北島、芒克、このふたりの詩人の項目は私が執筆しているということもあって、10月の初めになると、朝日新聞や毎日新聞がノーベル文学賞の記事の準備をするために、北島が受賞した場合の記事を私に依頼してきます。2000年に高行健 Gao Xingjian が受賞した時も、北島も候補に上がっているとの情報が流れて、記事の依頼がありましたが、最近またそういう動きが続いています。ノーベル賞の選考過程は50年間は非公開 confidential なので、ほんとうは誰が最終選考に残っているのか分からないはずですが、欧米の通信社、AP か AFP が数名の最終候補者の名前を毎年流します。

新聞社はその数名のうち誰が受賞してもよいように記事を事前に依頼するわけです。日本には世界のどの国の作家、詩人であろうと大体、研究者がいますから、北島が受賞した場合に備えて、その詩人の翻訳者であり研究者である私に依頼するというわけです。日本人ではこれまで川端康成、大江健三郎が受賞し、村上春樹が次に受賞するのではないかと日本ではもっぱらのうわさです。北島が受賞する可能性はよくわかりませんが、もしノーベル文学賞の選考委員会が「アジアの詩人」という枠組みで考えるならば、中国や韓国の詩人も候補に上がるだろうと思います。これまでアジアの詩人で受賞したのはインドのタゴールだけです。ノーベル文学賞は生きている方でないともられませんから、三島由紀夫のように死んでしまってもられません。生きている作家、詩人、中でも詩人にかぎってみれば、アジアの詩人の候補には北島も、たとえば韓国の金芝河も入るのではないかと、個人的には思います。

2. ノーベル文学賞の選考委員会にはマルムクヴィストというスウェーデンの中国文学者、中国文学の研究者が入っていますが、日本文学の専門家はいません。

川端康成も大江健三郎も選考委員は翻訳で読んでいるのです。スウェーデン語、英語、ドイツ語、フランス語などの翻訳を通して評価しているのです。翻訳がいかに大きな位置を占めるかが分かる事例ですね。詩の翻訳の場合は小説の場合よりもさらに翻訳の出来具合が影響するでしょう。詩の場合、翻訳は詩作、詩を作ることと同じような比重を持つと考えられるからです。なぜそう考えられるかというと、そもそも詩の生命である韻律、リズムや韻、押韻する韻ですね、は翻訳することができません。Aという言語からBという言語へ移す場合、韻律は受容言語であるB言語の韻律に置き換えるしかありません。翻訳者はA、B両方の言語の韻律に習熟していると同時に、自国の、日本語なら日本文学の韻律にも精通していなければならないわけです。また、訳語も詩の言葉は隠喩、メタファーを多用します。どの言葉を選択するかは、訳者の自らの母国語の教養、母語による詩的言語、すなわち日本語なら日本文学のなかでの詩的言語への素養が試される。どれほど日本現代詩なら現代詩の詩の言葉への感性を磨いているかが問われるわけです。そういう意味では、詩の翻訳も詩作の一種だと言っても過言ではないと思います。この私の評論「東アジアの詩的言語」では、卞之琳の「魚化石」を例に、武田泰淳、秋吉久紀夫、そして私、三者の訳を比較して論じています。

3. 詩の翻訳の等価性

詩とは何か、について何か言おうと思えば、これまでさまざまな解釈、定義がなされてきたと思いますが、私の評論では、アメリカの詩人・作家エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe（1809～49）と、ロシア出身の言語学者ロマン・ヤーコブソン Roman Jakobson（1896～1982）に触れています。

ポーは1849年に40才で亡くなりますが、亡くなった翌年、1850年に彼の詩論『詩の原理』（*The Poetic Principle*）が出版されます。その中で、「詩とは美の韻律的な創造である」（“I would define, in brief, the Poetry of words as The Rhythmical Creation of Beauty”）と言っています。ポーは、詩情を吹き込まれた、詩の靈感を得た魂が天上の美、神の美（supernal beauty）の創造にもっとも近づくのは音楽であろう、とも言っています。

‘It is in music, perhaps, that the soul most nearly attains the great end for which,
when inspired by the Poetic Sentiment, it struggles—the creation of supernal Beauty.’

ヤーコブソンは「言語学と詩学」という評論、これは1960年にアメリカのインディアナ大学で開かれた人類学者・言語学者の学会のまとめの講話、短い講義のようなまとめ（Closing Statement）なのですが、この評論が詩を言語学的に解明する原理を説き明かしたと見られているものです。ヤーコブソンは「詩的機能は等価の原理を選択の軸から統合の軸へ投影する」（“The poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination”）と言っています。これについてはあとで、また触れます。

今日の話で触れたいものに、村上春樹の小説『海辺のカフカ』の中で詩について語られている場面があります。そこでは詩について、「つまり佐伯さんは、その歌詞の言葉をどこかべつの一たとえば夢の一空間で見つけてきたのかもしれないということ？」と主人公のカフカ少年が大島さんに問いかけ、図書館職員の大島さんが、「優れた詩というものは、多かれ少なかれそういうものだからね。もしそこにある言葉が、読者とのあいだに預言的なトンネルを見つけられなかったら、それは詩としての機能を果たしていないことになる」と答えています。

ポーと村上春樹は詩の本性、根本的なすがた、人間にとって詩が存在する意味について語っている、詩とは何かについての答えを語っていると思います。ヤーコブソンは、詩の言語的な本質を解明してみせてくれています。そこでのキーワードは「等価性」という言葉です。等価性とは「等しい価値を持つ」ということです。ですから、言語間の等価性については村上春樹も、「あらゆる言語は基本的に等価であるというのは僕の終始変わらない信念である。そしてあらゆる言語は基本的に等価であるという認識がなければ、文化の正当な交換もまた不可能である」と言っています。これは基本的な等価性ですね。

ヤーコブソンは、詩を言語学的にどう解き明かすかという難題に挑んだわけです。何かを言い表す時に、我々は構文 syntax、文を組み立てる統語法に拠って発話している。その発話は、語彙群、類似性をもつ単語群からある語彙を選択して、選択した語彙を結びつける、選択 selection と結合 combination を繰り返しているのだ、と言います。それはそうですね。「時雨、夕立、通り雨」などの語彙群からたとえば「時雨」を選択し、「降る、そぼ降る、降り注ぐ」から「そぼ降る」を選択して「時雨がそぼ降る」と言う、というのはそのとおりです。その「類似性を持つ」ということを「等価である」としてこの発話の仕組みを説明しているのですが、その等価性が詩的言語では統合 combination に投影する、投入される project するということです。これは、押韻や対句、リフレンを考えればなるほどと思いますが、そのような形式面のことだけではなく、メタファーの用法にしても、卞之琳の「魚化石」の1、2行目を例にとってみれば、「あなたに抱かれたままの形になりたい」と「水の輪郭に溶け入ってしまう」とは、メタファーとしての「等価性」が統合、序列の構成上に投影されている、と言えます。ヤーコブソンが言う「等価の原理が選択の軸から統合の軸へと投影する」という定式はそうように解釈されると思います。

4. 中国現代詩における翻訳の位置

私の評論「東アジアの詩的言語」のなかで、たぶん今回の出版の意義にもっともふさわしい話題は、現代中国における翻訳の持つ意味、北島の言う「翻訳文体——ひそやかな革命」（原文は「翻訳文体——一場静悄悄的革命」）であろうと思います。1949年の新中国成立以後、中国社会は国民党時代よりも厳しい言論統制がしかれ、多くの作家、詩人は執筆を断念して沈黙してしまいましたが、その多くが翻訳家として外国文学の翻訳に携わったのです。カフカ、サルトル、サリンジャー、ベケット、エレンブルグなどが翻訳されました。しかしそれらの翻訳書は一般には流布することなく（一般の書店で売られるのではなく）内部刊行物として高級官僚の家庭の者だけがそれを読むことができました。彼らの翻訳文体は共産党支配の話法、ディスクールからは乖離、遊離したユニークな文体であったため、それを読むことができた知的階層が文化大革命下に下放先の農村や工場で、自らの新しい感性、認識を鍛え、文革後の文芸復興、中国現代のルネッサンスを準備した、という北島の論点です。文化大革命は権力闘争が招いた未曾有の動乱だと思いますが、この動乱のさなかに、新しい文学・芸術を求める動きが下放した青年の中から生まれる、彼らの多くは高級官僚の子弟、内部刊行物を読むことができた知的階層の出身でした。彼らの新しい意識、思想を育んだものが翻訳文体であったというのは、言語の力学、ダイナミクスとしてまことに興味深いことだと思います。

5. 東アジア（日本・中国・韓国）の詩的言語

中国は古来、自他ともに認める「詩の王国 Kingdom of Poetry」です。日本では、漢文として中国の古典を読んできました。いわゆる漢文訓読ですね。古代、中世の朝鮮でも、日本の訓読に似た方法があったとの報道を以前見たことがあります。中国ではもちろん原文をそのままの順序で読んで終わりですが、日本の訓読法は返り点を付けたり、一、二などの数字で順序を逆にして読み下すわけです。昔アメリカのイェール大学に訪問研究員で滞在していた時に、中国文学科の主任教授孫康宜 Sun Kangyi 教授にお世話になりました。台湾ご出身の宋词のご専門家です。日本では中国の古典詩をどう読むのかとおっしゃるので、こう読みますと、杜牧の「江南春」を例にして訓読で読み下しました。といっても、この詩は一ヶ所返り点があるだけですから、日本語の音読、訓読の知識があれば読み下せるのですが、平仄や押韻は再現しようがありませんね。

原文は、千里鶯啼緑映紅	qian li ying ti lu ying hong
水村山郭酒旗風	shui cun shan guo jiu qi feng
南朝四百八十寺	nan chao si bai ba shi si
多少樓台煙雨中	duo shao lou tai yan yu zhong

松枝茂夫氏の解釈では、「見渡すかぎり鶯が鳴きしきり、若葉の緑が花の紅に映えわたる。水辺の村にも山ざわの里にも、居酒屋の青い旗がはためいて、南朝以来の四百八十寺の寺々の数知れぬ堂塔がうちけぶる春雨の中に霞んでいる」（『中国名詩選』岩波文庫）。

これを、日本の漢文訓読法では、

千里鶯啼いて緑紅に映ず、
水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺
多少の樓台煙雨の中

と読みます。平仄（声調の平声と仄声との組み合わせ）が伝わらないのはもちろんですが、押韻している「紅、風、中」も、日本の訓読法では抜け落ちます。イェールの教授たちは「フーンそうか、そういう具合

になるのか」と興味津津でした。韓国で中国の古典詩をどう読むのか、大変興味があるところですが、それはまたべつの機会に教えていただくことにして、時間を現代に戻して1930年代の日本、中国、韓国のモダニズム詩の話に触れたいと思います。

私は、1930年代に彗星のように登場した韓国の詩人、李箱は当時の日本、中国、韓国の超現実主義、シュルレアリスムの詩の先端をいくものであり、たとえば日本の安西冬衛や春山行夫、中国の卞之琳らと比較しても、李箱の詩の磁場、彼の詩的言語は我々を震撼させるものである、と思います。東アジアの詩的言語を共時的にとらえる視点が1930年代にあっては成立するものでないか、ということはこの評論で述べています。

韓国の現代詩は、私は翻訳で読んでいるわけですから、今回の叢書のテーマにひきつけて言えば、翻訳の恩恵を受けて、こうして韓国で講演までさせていただいている、ということになります。翻訳で読んで、韓国にもすぐれた詩人がたくさんいらっしゃると思いました。姜恩喬、羅海哲、金南柱、李是煥、呉世榮、権宅明、王秀英などの詩に惹かれますし、日本に居る、あるいは居た「在日」詩人の中にも、申有人、崔華國、姜舜、金時鐘、李明淑、庾妙達、崔一恵、李承淳などの優れた詩人がいます。「在日」の詩人は日本語で書いたものを読んだのですが、鮮烈かつ強靱な詩性に感銘を受けました。

文学と言語の関係で言えば、たとえば日本語で書かれ、日本で発表、出版された文学作品は、ふつう作者が日本人でなくても日本文学として読まれます。日本でも中国人の作家が日本語で作品を書いてその作品が芥川賞を受賞していますし、イギリスで活躍する日本人作家カズオ・イシグロ氏の“NEVER LET ME GO”などの作品はイギリス文学として読まれていますから、韓国や在日韓国人の方が日本語で書かれ、日本で発表した作品は日本文学として読まれるわけです。2000年にノーベル文学賞を受賞した高行健（1940～）は87年末に中国を出国、ドイツを経てフランスに定住、90年にフランス国籍を取得、もちろん中国語で書いた『靈山』がその受賞の主な対象作品となったわけですが、フランス語で戯曲を書いて、フランスで上演していますから、その戯曲はフランス文学として読まれ、鑑賞されているわけです。韓国文学と日本文学が交流を深めるには、現代史の歴史的な問題をまず解決しなければなりません。歴史historyではなく現代詩poetryについて言えば、その交流が広く深く展開していくことを願っています。韓国の詩人たち、在日韓国人の詩人たちの詩はきっと日本詩壇に鮮烈な刺激をもたらすと思います。

【付記】 本稿は2015年5月8日、韓国東義大学東アジア研究所主催の基調講演会においての是永駿先生の講演原稿をそのまま掲載するものである。

詩は原語で鑑賞しないとほんとうの良さはわからない!!

—世界の平和と APU を愛した是永学長への思い—

金 賛會¹

「昨秋80歳を迎えましたが、日本は80歳以上が人口の1割を占めるとのこと、老けこむにはまだ早い？」2024年の賀状には、このようなメッセージが書き添えられていました。その賀状を受け取ってほどなくして、先生と永遠の別れがやってくるとは想像もしませんでした。

尊敬する学者であり、世界の平和とAPUの発展に多大なるご貢献をされた是永先生。コロナも落ち着き、これからさらなるお仕事を成し遂げられるものと信じていたのに。このような形で去られるのは本当に残念で悔しい思いです。あまりの衝撃の大きさにいまだに現実として受け入れることができずにいます。

先生との出会いは16年前（2008年）、学長として大阪外国語大学と大阪大学の合併のお仕事を終えられ、APUに特別招聘教授として赴任されたのが始まりでした。先生の最初の印象は端正なお顔たちに加え美声であり、見るからに著名な学者という雰囲気が漂っていました。学長在任中にAPUは、日本社会のグローバル化をけん引する文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）」に採択されました。加えて日本国内では3校目となるマネジメント教育の国際認証「AACSB」の取得等、日本のみならずアジアや世界の中で、世界水準の大学としてのAPUの地位向上に多大なご尽力をされました。

当時、小生は是永先生のもとで、学生部長、副学長などを務めていました。普段、先生とのつながりは大学の行政の仕事が中心で、研究者としてのお姿をあまり見る機会がありませんでした。是永先生は、日本においての中国文学研究の第一人者です。特に茅盾（Mao Dun）などの現代小説や、北島（Bei Dao）、芒克（Mang Ke）などの中国の現代詩については、先生の右に出るものはありません。朝日新聞や毎日新聞などが毎年ノーベル文学賞の記事の準備のために、北島が受賞したことを想定してその関連記事を掲載するために先生にその原稿を頼んでくるほどであると聞いていました。先生からある日、大阪大学から授与された博士学位論文『茅盾小説論—幻想と現実—』（汲古書院、2012年）をいただきました。以前から感じてはいましたが、是永先生がこれほどまで研究や文学的な才能の素養の持ち主であることは知りませんでした。

その魅力に感心して、韓国の学会誌や書籍の論集に先生の論考を紹介したところ、韓国の大学と学会から講演の依頼がありました。小生もその際、是永先生に同行しました。2015年5月8日、韓国東義大学の東アジア研究所主催の出版記念を兼ねた基調講演は、「近代翻訳と東アジア」という題名でした。最初の部分だけはどうしても韓国語で話したいという意向でした。そこでAPUの韓国人の講師に頼んで講演原稿の韓国語の発音を何回も練習されるなど、相手を思う深い心と誠実さに感銘を受けました。



2015年5月8日、韓国東義大学東アジア研究所主催の基調講演会の様子

¹ 立命館アジア太平洋大学 元副学長

また、2016年10月26日にAPUで開催された韓国日本近代学会「第34回国際学術大会」においては、冒頭のあいさつと、基調講演をお願いしました。冒頭のあいさつで「古代日本のほうが今よりずっと外に開かれた社会であったのです。この九州には日本人、韓国人、中国人が混ざり合って生活していたのではないかと想像します。APUは日本に欠けている多元的発想、多文化、多極という発想を追求する大学であるという点だけでも存在する価値がある」と、おっしゃられました。そのことが会場の学会員の皆さんに感動を与え、大きな拍手が沸き起こったのを今でも鮮明に覚えています。

2020年以降のコロナ禍での先生とのメールのやりとり（ワクチン開発が始まったばかりの際）では、ご健康をととても気遣われ、「まずはコロナ禍を生き延びることが先決ですね。免疫力向上には、入浴40度で15分、肩までつかも血液の循環のために大切だそうです。別府は温泉がありますから、鬼に金棒ですね」とか、「まことにやっかいな疫病ですが、免疫力を高めるしか手だてはなさそうです。ショウガ、にんにく、ゴーヤー、海藻、玉ねぎなどを意識的に食べるようにしています」、「ある医者が、このウイルスには、キノコのマイタケと、ヤクルト1000がいいと言っていました」などと書かれていました。ご自身のみならず常に相手を思う心遣いが伝わってくるものでした。

また、2018年4月のメールでは、「退職して時間もありますので、フランス語と韓国語の勉強を始めました。フランスも韓国も中国同様すぐれた詩人が多いし、詩は原語で鑑賞しないとほんとうの良さはわからないと思います。原語で鑑賞できるまで2、3年にかかるでしょうから、それまで元気で生きていられるかが問題ですが」と、さらなるご自身の研究に強いご意欲を示されていました。それだけにまさかこのように早くご逝去されるとは、無念でなりません。

学長退任後の2015年4月、APU正門近くには是永先生のご寄付による「サクラ・スカイ・ガーデン」が造成されました。そこには「桜は夢なり、自由は翼なり、知は力なり」という是永先生ご自身による言葉が残されています。



その直後に寄せられたメールでは、「世界からヒューマニティーが次第に消えて、差別、抑圧、暴力がはびこっています。APUの学生は人間性を尊ぶ『世界市民』として育ててほしい。きっとそうだと確信しています」というメッセージがありました。「来年の桜の季節には、APUを訪れてみたいと願っています」とも書かれていました。その後すぐコロナ禍となり、桜の季節のAPUのご訪問はかなわず、そのままで旅立たれてしまいました。

是永先生が学長として懸命に築かれたAPUに今後も世界から多様な学生たちが集い、人間性を尊ぶ「世界市民」となって羽ばたくことが先生への恩返しになることでしょう。先生の慈愛に満ちたまなざしがキャンパスのあちらこちらで形を変えて私たちを温かく見守ってくれていることを常にかけています。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2024年11月

自由な思考空間を求めて

—— 是永先生が追いかけたもの ——

西川 孝次¹

是永舜—是永駿先生の俳号である。2022年春、句集『間氷期』が送られてきた。APU退職後、松尾芭蕉に「私淑」されていると聞いてはいたものの、句集まで出版されるとは思ってもよらなかった。このあたりの句はいかにも先生らしい作品だなあと、先生のしたり顔を想像しながら、厚顔無恥にも批評めいた読後感をお送りしたところ、意外にも「わが意を得たり」と書かれた丁寧な返事が届いた。それを機に旧知の者が集まって、京都は鴨川のほとりで句会を開くようになった。句会といっても、是永俳句塾のようなもので、どのような言葉を使えば情景なり感情なりをうまく描写できるか、よもやま話を兼ねて、あれこれ論じるのだが、その都度、是永先生の言葉に対する研ぎ澄まされた感性に驚嘆の念を深くするのだった。

月の光に照らされた門を「推す」と表現した方がいいのか、「敲く」とした方がいいのか、唐の詩人・賈島は大いに悩み、当代きっての名家・韓愈の助言を得て「解決」したという故事はあまりにも有名だが、その悩みを句作でも疑似体験できるような「授業」を展開されるのが是永先生であった。

言うまでもなく俳句は五七五の十七音節で表現する言葉の芸術である。一音節一義とならない日本語にあって、わずか十七音節で、季節感の伴う情景なり情感を表すのは頗る高度な言語活動といえる。創作する側は簡潔な言葉の組み合わせに意を託し、鑑賞する側はその意を汲み取り、想像の世界を限りなく広げていく-----何と自由で澁刺とした思考空間の創造であろう。また日常的な言葉を使いつつ文芸性のある表現を創るという芭蕉の精神を具現化することは簡単そうで実に難しく、それだけに奥行きが深い句作の世界は多くの人を魅了してきたのだろう。

作家の某氏が、言語の原初形態は詩であった可能性が高い、と大胆な説を述べたことがある。確かに多くの言語にあって、詩や歌は非常に古い時代から存在し、いわゆる小説や物語、長編作品は後になって生まれてきている。

是永先生は、中国現代文学（散文）の世界から中国現代詩（韻文）の世界へと研究領域を移されてきた。そして退職後、自由人の身分を得られてからは俳句の世界を逍遙されるようになった。簡潔な表現は対象の本質に迫って初めてなしえることである。そう考えれば、先生は、いわば水源を求めて、上流へ上流へと遡り、より自由で澁刺とした思考空間をめざされたような気がしてならない。

中国では、遙か昔の堯、舜、禹の治めた時代こそ、人々が生活を謳歌できた理想の時代である、とする思想が伝えられてきたが、舜の俳号にはそのようなロマンが込められていたのかもしれない。

「人間の思考と感性とを本源的にコード化する言語の研究は、無限の可能性を秘めたフロンティアなのである」（『APU言語論叢』創刊号2016年巻頭言）と喝破された是永先生の有言実行ぶりを感ぜざるを得ない。APUで言語関連科学の研究に邁進する人々がそのあとに続けられることを願ってやまない。

2024年10月11日

¹ 立命館アジア太平洋大学 言語教育センター元センター長

是永駿さんを想う

神戸 輝夫¹

今年1月30日、午前9時40分、携帯のラインに京都の西川孝次さんからメールが入った。「1月27日に是永APU元学長が急性心筋梗塞で亡くなりました。享年80歳。ご冥福を祈ります」とあった。不意打ちを食らって一瞬たじろいだ。詳細はしばらく分からなかったが、4月3日、駿さんの弟・是永幹夫さんから「今年1月27日急逝された兄・是永駿の追悼記事が大分合同新聞社のGXプレスに掲載されました」のメールをいただいた。この記事を読んで亡くなられた時の様子が分かった。追悼文はAPU名誉教授金賛會さん。

私は、是永さんが1976年10月に経済学部中国語教員として着任されたのを契機に知り合った。私は1973年4月から教育学部に在籍していた。大学の中で数少ない中国研究者として約3年半お付き合い頂いた。「物静かな学者、情熱を秘めた文学青年」と言うのが私の印象。自選詩集『白亜』を頂いた。この時期の一番の思い出は1979年11月に共に訪中したことである。

九州農学研究友好訪中団は九州大学教授田代隆さんが団長、大分大学からは経済学部教授山本雅之さん、助教授是永駿さん、それに私が参加した。私は近代中国農民運動を研究していたので山本教授が声を掛けてくれた。大分県庁農政部の職員3人もメンバーとなった。帰国後、参加した6人による『中国農村視察報告』（発行九州農業経済学会大分支部1980年5月）を出した。是永さんは「エピソードの中の精神風土―西南中国見聞雑記―」を投稿。この小冊子はごく限られた人たちの間でしか読まれていないと思う。従って是永さんの文を読まれた方は少ない。「雑記」の中の一つを紹介したい。訪中団の随行通訳二人についての文である。

40代の柴吉庸さんの印象は「古典文学についての自らの教養に自負を抱く文人である彼は温顔を絶やさず如才がない。しかし時折厳しい一面をものぞかせる（文革経験のこと）」。

20代半ばの張景華さんについては「自らの民族への誇りに満ちた現代女性の典型である」と述べ「旅行中に作った詩の中から彼女に献げよう」と次の七言絶句を載せている。

華旅二週友誼深	華旅二週、友誼は深し、
優情応比荔枝芬	優情まさに荔枝の芬（かおり）に比すべし。
今朝暫別不懷哀	今朝暫しの別れに哀しみを懷（いだ）かず、
花影窓辺見你身	花影窓辺、君が身の見（あらわ）れむ。

2009年の年末、是永さんと西川孝次さんが会いたいと連絡してきた。西川さんとは初対面である。大分市の中華料理店で会った。是永さんから「翌年4月からAPU孔子学院院長をお願いできないか」との申し出を受けた。是永さんは2008年1月からAPUに招聘され孔子学院院長を務めており、2010年1月からAPU学長就任が決まっていた。話をする中で西川さんが京都の堀川高等学校の後輩であることが分かった。まさに奇縁である。帰宅して妻と相談した。妻は末期ガンで死が迫っていた。私は翌年3月で放送大学大分学習センター所長の仕事が終われば、彼女の看護に努めるつもりであった。妻は「貴方しか出来ない仕事だから受けなさい」と言う。妻のこの言葉と西川さんの「副院長として手伝いますよ」の言葉に押されて申し入れを受けることを決断した。

是永さんが、私の事を覚えていてくれたことで、彼の率いるAPUで仕事するという私にとっては思いがけない関係が生まれた。「物静かな学者、情熱を秘めた文学青年」の印象は変わっていない。あの是永駿さんが今はいない。きっと白玉楼の中で恩師相浦果先生など知己に囲まれて詩作に耽っているのだろう。

2024年9月9日

¹ 立命館アジア太平洋大学 孔子学院元学院長

感謝のことば

田原 洋樹¹

是永駿先生！

今は、木曜日の2時限目。是永先生と同じ夢を追いかけて、一緒に働いた仲間は、十文字原のキャンパスの教室で授業しながら、あるいはオフィスで大学創造の実務に汗を流しながら、このときを迎えています。今日はわたし田原が、みんなの感謝の気持ちをお伝えするためにこの場にやってきました。

わたしが初めて是永先生にお会いしたのは2007年10月。大阪外国語大学の大阪大学との統合という大事業を遂げて、晴れて自由の身となられて1ヶ月が経ったころでした。当時、わたしが担当していたリレー講義の中国語の回にご出講くださいました。別府北浜のバス停にお迎えに上がった日のことを覚えています。その半年後、APUにご赴任されて、まずは孔子学院長。その1年後、2009年4月には副学長にご就任されました。

外大出身の先生は、言語教育をととても大切にしてくださいました。教育経験が浅い語学教師との勉強会や、ときに夜の一献までお付き合いくださり、たくさんの示唆と刺激をお与えになりました。また、この時期の是永先生は学内のさまざまな教員グループとの交流に時間を割いていらっしゃいました。何度も行ったのは湯布院の亀の井別荘、「湯の岳庵」という料理屋。夜遅くまで意見交換して、と言いたいところですが、聞き上手な是永先生は聞き役、引き出し役に徹していました。「APUには面白い先生が揃っている」と満足するような表情の先生を見送るたびに、この先生がAPUの学長になってくださったらどんなに楽しいことだろう、と思うようになりました。しかし、是永先生は、わたしの秘めた思いを知ってか知らずか、相変わらず飄々と淡々とご自身の学問を深めながら、前任校とは規模も校風も全く異なる立命館、そしてAPUでの日々を楽しんでいらっしゃるようでした。

是永先生に「AP言語はAPUらしさの源泉。AP言語圏をぜひご訪問ください」とお願いして、ベトナムへ出張いただいたのは2008年12月。メコンデルタでは、「この蛇を首から掛けると大金持ちになる。大きな仕事が降ってくる」というツアーガイドのことばに笑いながら、長身の先生よりもまだ長い大蛇を首にお掛けになりました。

そして、2010年1月。多くの教職員が待ちわびた是永学長ご就任。しばらくして、学長室に呼ばれました。「田原さん、メコンデルタの大蛇を覚えていますか」と、こういうときの是永先生は丸い目をぱちくりさせながら、茶目っ気たっぷりです。まるで、田原君の口車に乗せられて蛇を首から掛けたせいで自分が学長になってしまったじゃないか、と言いたそうな笑顔が忘れられません。そして、この余裕こそが、命を削るといわれるほどの激務である学長職を8年、前任校の大阪外国語大学学長と合わせると11年半になる学長生活の原動力のひとつだったように感じます。

国立大学と私立大学の両方で学長を経験された是永先生ならではのご発言が思い出されます。先生が「同じ事柄を反対のことばで表現するんやね」と少し興奮気味におっしゃいました。「大阪外大では辞退率、APUでは手続き率」、入学試験の会議からお戻りになったときのひとことです。国立と私立、両方を知っているからこそ、是永先生は学生募集や入学試験の重要性を強く感じていらっしゃいました。その姿勢にわたしたち教職員は大いに励まされ、士気を高めました。

学長時代にも、忙しい校務を縫って、お食事をご一緒しました。こ



2008年12月ベトナム・メコンデルタにて

¹ 立命館アジア太平洋大学教授（言語教育センター元副センター長）

ういう席では学内の生臭い話題はまったくなさらずに、ひたすら学問談義です。わたしたちの研究に耳を傾けながら赤ワインを召し上がる。そして、先生ご自身のご研究については「詩の研究は面白い。評論も翻訳も面白い。そして、やっぱり自分で詩を作ることが楽しい」と語っていらっしゃいました。食事が一段落つくと、奥さまにラブコールするのが是永流。わたしが「愛妻家ですね」と冷やかすと、「高齢者だから生存確認。家内が心配するので」と大いに照れる先生の横顔も懐かしいです。

ずっと気になっていたのは、学外でお目にかかるときには、あるスポーツメーカーの革製スニーカーをご愛用されていたことです。ダンディな詩人とスニーカーの意外な組み合わせは、今年2月に先生と永遠のお別れをした席で、先生のご令弟が「兄貴はスポーツ万能で芸術センスも抜群。小学生時代は少年野球、左腕のエース。是永のボールを打てる選手は大分県内にはいないと言われるほどだった」と明かされて、ようやく合点がいました。ふと見ると、先生のお嬢さまも左利きでした。

先日、是永学長時代を知らない職員から「是永先生のご発言で、特に印象深いものは何ですか」と聞かれました。即答しました、もちろん「水路を開ける」ですよね、先生。是永先生が何度も何度も繰り返された「水路を開ける」。「英語と相性がよろしくない学生にはAP言語という水路を開ける。新たな外国語と、新たに出会う。そして新鮮な気持ちで英語にまた向き合えばいい」「いろいろな学問への水路を開けてあげたい」「APUで学ぶということは水路を開けるということだ」など、教育者としての是永先生は「水路を開ける」ことを貫いていらっしゃいました。

こう答えながら、わたしは「水路を開ける」って何かに似ているなあと思いました。是永先生、R2030です！「挑戦をもっと自由に」がまさに「水路を開ける」なのではありませんか。そう気が付いて、わたしはもっともっと立命館が好きになり、APUがいつそう愛おしくなりました。是永先生が学園を去られ、そして遠く西の彼方に旅立たれてしまったいまも、十文字原には先生のお気持ちが息づいているのです。

天国にいらっしゃる是永先生には、世界中の若者の青春が輝き、たくさんの言語が響き合うところがAPUの目印ですね。どうかいつまでもAPUの是永駿先生でいらっしゃってください。そして、わたしたちAPUの挑戦をこれからも見守ってください。

是永駿先生、ありがとうございました。

ご家族のみなさま、ありがとうございました。

於：レンブラントホテル大分
2024年7月4日

中国語程度副詞における程度的意味について

前田 真砂美¹

要旨

本稿は、現代中国語の程度副詞のうち使用頻度が高いものを対象として、先行研究をもとにその程度的意味の由来を整理し、各語のものと意味と程度的意味とがどのように結びついて程度副詞化したのかについて考察する。その結果、程度副詞には、数量やものの大きさ、目立ち性などを程度の高低になぞらえることで程度的意味が生じたものと、事物に何らかの性状を認める際のプロセスを示すことで程度的意味が生じるものと、大きく二つのタイプがあることを示した。

【キーワード】 中国語、程度副詞、程度的意味、意味特徴

1. はじめに

モノやデキゴトのような、ある程度の客観性が見込まれる物理的・外界の事実に対する言及や描写に比べて、物事の性状の度合いや位置づけを述べようとすることは、多分に主観的であり個人的であり、高度に抽象的であるといえる。そのような程度性を表すためには様々な方策がとられる。とりわけ、高程度を表す形式には新しいものが生まれ続けており⁽¹⁾、現代においても、“暴”、“超”、“巨”、“狂”といった新興の程度副詞（呂文杰・張青嶺2018、曹春靜2022など）や、“X翻天”（蔡麗2012など）のような程度補語が生まれている。我々は、事物に認められた性質・状態の程度を効果的に表す方法を、常に模索しているのである。「程度性をどのように把握するか」、「何のために、どのような手段で程度性を表現するか」という問いに答えを出すことは、中国語における概念化、言語化のメカニズムを解明することにもつながると考えられる。

本稿は、現代小説においてよく使われる程度副詞を対象として、程度表現に用いられる語（句）がどのような意味特徴や性質をもち、それが程度性表現にどのように関連しているのかという点について、先行研究をもとに整理し、それらがどのような類型をなすのかについて考察する。

2. 程度範疇の形式化における程度副詞

中国語における程度範疇については、陶瑗麗2012、蔡麗2012、呂文杰・張青嶺2018などの研究に見られるように、程度性が他のどのような領域と関連しているか、程度性がどのような形式で表現されるか、といった議論がなされている。程度範疇の形式化について以下に概観する。

陶瑗麗2012は、語彙的手段として程度副詞、性質形容詞、状態形容詞、名詞、固定語（“千～万～”など）を、統語的手段として重ね型（“复叠”）、固定形式（“还要～”、“更要～”など）を、語用的手段として語気、調音を挙げる。

呂文杰・張青嶺2018は、語彙レベルでは状態形容詞、程度義をもつ語（“飞快”など）、程度義を含む固定フレーズ（“至高无上”など）を、統語レベルでは重ね型（“重叠”）、程度性連用修飾語（程度副詞、指示代詞）、程度補語、程度と関連するフレーム構造（“别提多～了”など）、程度と関連する構文（比較文、対比文）を、語用レベルでは語気を挙げる。

程度補語を中心に扱った蔡麗2012は、語彙レベルの表現形式として状態形容詞、前に程度修飾語素を加えた語句（“暴涨”、“严寒”など）、類義二音節語（“钦佩”、“聪慧”など）を、統語レベルの表現形式として程度語句（程度副詞や一部の形容詞・動詞・固定フレーズ）、程度義を含むフレーズ（“千～万～”など）、程度状語（程度副詞、指示代詞、一部の形容詞・名詞が連用修飾になるもの）、程度補語、重ね型（“重叠”）、程度と関連するフレーム構造（“再……不过／没有了”など）を、語用レベルの手段としてコンテキスト、

¹ 奈良女子大学文学部言語文化学科 日本アジア言語文化学コース 准教授

Email: mmaeda@cc.nara-wu.ac.jp

語気、重音を挙げる。

上記のように、程度範疇の形式化は広範囲にわたっており、語彙、統語、語用の面においてそれぞれ様々な手段が挙げられている。これらのなかで、現代中国語において最もよく用いられる形式が、程度副詞による連用修飾である（蔡麗2012:42⁽²⁾）。なお、陶瑗麗2012は程度副詞を語彙的手段に位置づけているが、これは副詞という品詞レベルでみたものであり、この「程度副詞」は、文法役割としての状語（連用修飾語）になる場合と補語になる場合の両方を含んでいる。一方、蔡麗2012は「程度語句」のなかに程度副詞が連用修飾に用いられるものを含め、これを統語レベルに位置づけている。呂文杰・張青嶺2018も同様の立場である。本稿では、統語レベル、すなわち、連用修飾に用いられる程度副詞を対象とする。

本稿が行なった初歩的な調査では、中国語は日本語に比べると、程度副詞の出現頻度が高いことが見て取れる。以下の表1と表2は、中国語と日本語の現代小説における出現回数上位20語の程度副詞を並べたものである。用例収集の対象としたのは下記の小説集で、中国語三冊、日本語三冊であるが、中国語を日本語訳した場合、およそ1.5倍の長さとなることから、日本語の合計文字数が中国語（約576,000字）の約1.5倍（約864,000字）となるよう調整し、各程度副詞の出現回数も同様に処理した。

中国語：《2015中国最佳短篇小说》、2016年（2015年発表作品を収録）⁽³⁾

《2016中国最佳短篇小说》、2017年（2016年発表作品を収録）

《2017中国最佳短篇小说》、2018年（2017年発表作品を収録）

収録小説数合計：50編

文字数合計：約576,000字

日本語：『短篇ベストコレクション現代の小説2016』、2016年（2015年発表作品を収録）⁽⁴⁾

『短篇ベストコレクション現代の小説2017』、2017年（2016年発表作品を収録）

『短篇ベストコレクション現代の小説2018』、2018年（2017年発表作品を収録）

収録小説数合計：49編

文字数合計：約624,500字

また、程度副詞の定義と範囲については研究者によって見解が分かれる。本稿では便宜的に、中国語については、程度副詞や程度表現を考察した時衛国2009、季薇2011、呂文杰・張青嶺2018のうち少なくとも2編、日本語については、渡辺1990、時衛国2009、鳴海2013のうち少なくとも2編において、それぞれ程度副詞とみなされている語を対象とした。

中国語で出現頻度が突出して高い程度副詞は“很”であり⁽⁵⁾、上位20語の出現回数の約37%を占める。現代中国語では、性質形容詞（“甲类形容词”（朱德熙1956）、“性质形容词”（朱德熙1982））は単独で述語にならず（沈家煊1995など）、程度副詞などを伴わずに無標で述語になると対比義を含み、多くが対比的コンテキストにおいて使われるとされる（朱德熙1956、沈家煊1995、張国宪2006、劉振平2023など）。程度副詞などを用いない“这个苹果大。”は「このリンゴは大きい。」と完全に同等の表現ではなく、“这个苹果大，那个苹果小。[このリンゴは大きくて、あのリンゴは小さい]”のような含意をもち、あるいは、そのようなコンテキストの支えを必要とする。“很”はこのような対比的ニュアンスを帯びることを避けるために用いられるため、使用回数が多くなっている。しかし、“很”を除いても、中国語における程度副詞の出現回数は多く（2,543回）、日本語のおよそ3倍である。

本稿は表1の使用頻度上位語を中心に、程度的意味が生じる経緯という観点から、中国語の程度副詞の類型を試みる。

表1 中国語上位20語

順位	程度副詞	出現回数
1	很	1,302
2	最 ⁽⁶⁾	334
3	有点(儿)	304
4	太	269
5	更	249
6	有些	248
7	好	197
8	还 ⁽⁷⁾	138
9	非常	85
10	挺	73
11	特别	64
12	十分	59
13	更加	39
14	比较	38
15	极	30
16	微微	29
17	稍	22
18	略	20
19	够	19
19	相当	19
	計	3,845

表2 日本語上位20語

順位	程度副詞	出現回数
1	すこし	126
2	もっと	123
3	いちばん	86
4	ちょっと	76
5	とても	54
6	さらに	50
7	ずいぶん	44
8	かなり	43
9	けっこう	36
10	もっとも	33
11	なかなか	30
11	ひどく	30
13	じゅうぶん (に)	29
14	ずっと	28
15	やや	19
16	たいへん (に)	15
16	より	15
18	しょうしょう	14
19	きわめて	12
20	ひじょうに	11
	計	874

3. 程度的意味

本稿と同様の観点で日本語の程度副詞について考察したものに、鳴海2013、2015がある（鳴海2013は改稿のうえ鳴海2015に収録）。鳴海2013、2015は、漢語副詞を主な対象として、副詞化による程度的意味の発生の過程とその類型を以下の①～③の三パターンにまとめている（④は、程度副詞が事態に対する評価の意味を帯びて使用されるようになったもので、本稿の考察の対象外）。本稿で用いる「程度的意味」も、鳴海2013、2015に倣ったものである。

- ① 量的意味から程度的意味へ
例) 相当、随分、大分、十分
- ② 「真実性」の意味をもとに、評価の意味が程度（度合強調）性を帯びる
例) 真実、まこと（に）、本当（に）、事実、実際
- ③ 「比較性」の意味をもとに、評価の意味が程度性を帯びる
例) むげ、格別
- ④ 程度的意味が評価性を帯びる
例) 随分、結構

上記のように、日本語の程度副詞研究においては、程度性に隣接する領域として「評価性」が認められ⁽⁸⁾、その中で特に程度的意味を発生させやすい類型として、「真実性」と「比較性」が挙げられている。鳴海2013、2015はさらに、工藤1983 [2016] において程度的意味の周位的・過渡的なものとして挙げられる下記の八種類の語群を上記①～③のなかに位置づけ、程度的意味発生の過程の類型としてまとめている。「a 程度量性の形容詞から」、「b 目立ち性（主として形容詞から）」、「c とりたて性 比較性のもの」、「d 異常さ 評価的」、「e 感情形容詞から」、「f 真実味 実感性」、「g 予想や評判との異同」、「h その他」（工藤1983 [2016:105-107]）の八種類であり、本稿の第5節以降の意味特徴の考察は、これらを参考に行っている。

4. 他の品詞からの転成

品詞の観点からみれば、多くの言語において、程度副詞は形容詞から転成するものが多い。曹春静2022は、形容詞の副詞化が最も普遍的な副詞化現象である⁽⁹⁾と述べ、英語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、日本語でも、多くの程度副詞が形容詞の副詞化によってできており、名詞や動詞から程度副詞になるものは、形容詞の副詞化に比べれば少数であると指摘している（曹春静2022:33-34）。

中国語においては、曹春静2022も指摘するように、形容詞からの文法化が比較的多いものの、動詞、名詞、フレーズ由来のものも少なくない。形容詞由来の程度副詞として、曹春静2022は“特別”を挙げる。“太”、“好”なども形容詞由来と考えられる（叶玉英2009、武振玉2004a）。また、名詞から形容詞用法を経て副詞になったものに“稍”、“略”や“特”などが挙げられる（张谊生・潘晓军2007、李宜蔓2022）。

曹春静2022が名詞由来のものとして挙げる“最”、“极”、“顶”は、形容詞を経ず、名詞を連用修飾に用いたことから副詞用法が生まれたと考えられる（栗学英2011）⁽¹⁰⁾。

動詞由来のものには、曹春静2022は“比较”、“绝顶”、“愈发”、“过分”を挙げる。このほかに、“更”、“还”、“挺”、“相当”、“十分”なども動詞由来とみられる。そしてこのなかにも、形容詞用法を経て程度副詞になったものと、そうでないものがある。前者は“挺”、後者は“比较”、“更”、“还”、“相当”、“十分”などである。“非常”、“异常”、“格外”、“分外”、“过分”や“有点”、“有些”などのフレーズ由来のものも多い。“非常”、“异常”については、もとは述語-目的語フレーズ（“述宾词组”）で、“喜悦非常”、“严暴异常”のように心理動詞や形容詞の後に置かれる用例が先にあり、被修飾語に前置される副詞的用法の例があとに現れる（武振玉2004b）。

このように、中国語の程度副詞には、形容詞から、もしくは形容詞用法を経て副詞になったものと、そうでないものがあり、後者の数も決して少なくない。

5. どのような意味特徴をもつ語が程度副詞になるか

5-1 意味特徴の傾向

前章では、どのような品詞から副詞用法が生まれ、程度副詞として定着するかについて、先行研究をもとに確認した。中国語の程度副詞には、形容詞のほかに、名詞や動詞、フレーズからなるものがある。異なる品詞のそれらの語句の、どのような特徴が、程度的意味につながっていくのだろうか。

程度副詞になる形容詞・名詞・動詞には、[+量]の性質が取り出せるという意味特徴のほかに、下記の四つの傾向があることを曹春静2022が指摘している⁽¹¹⁾。

- (1) “坏 [悪い]” (坏、可怕 [悪い、恐ろしい]) を表す語は程度副詞になりやすい
- (2) “好 [良い]” を表す語も程度副詞になりやすい
- (3) 強度、密度が高いことを表す語も程度副詞になりやすい
- (4) 終点、端点や最高点の意味を持つ語は程度副詞になりやすい

曹春静2022は上記にそれぞれ当てはまる中国語の程度副詞を例示していないが、本稿が対象とする程度副詞を中心にみると、およそ以下のようになる。

(1) に該当するものに“很”が挙げられる。“很”は“不听从 [もとる、さからう]”義をもつ“很”と“犬斗声 [犬が争う声]”義をもつ“狠”がそれぞれ“凶恶 [恐ろしい、ひどい]”の意へと意味拡張し、両者が通用されるようになったことで程度副詞への文法化が進んだとされる（王静2003、黄荷2012など）⁽¹²⁾。

“好”などが(2)に該当する。もとは“女子貌美 [女性の容貌が美しい]”を表す形容詞であるが、宋代に入って程度副詞用法が多く見られるようになる（武振玉2004a）。

“极”、“最”、“顶”などが(4)に当てはまる。栗学英2011によれば、程度副詞“极”、“最”はともに「最高位、最高点」を表す名詞から文法化したものである⁽¹³⁾。“极”はもとは名詞で、《说文解字》に“极、栋也”と

あるように、屋根の最も高いところ（棟）に渡す横木を指す。“頂”は、頭の最上部を表す名詞が形態素化して“名詞+頂”や“頂+名詞”の形で用いられるようになり、後者が副詞用法につながったとされる（赵军 2005）。

上記の（1）～（4）に当てはまらないものを、以下に取りあげる。

5-2 量的意味

日本語と同様に、中国語においても量的意味から程度的意味が生じたものがあるが、これは、語義的に数量の多寡を表すものとそうでないものの二つに大きく分ける必要があると思われる。

“有点”、“有些”、“多少”などは、語義的に量を示すものである。日本語においても、「ちょっと」、「少し」のような量の副詞は低程度の表現（「ちょっと大きい」、「少し小さい」）にも用いられる。数量が多いことから高程度へと意味拡張したものには、“多”、“够”⁽¹⁴⁾などが挙げられる。

一方、“相当”、“十分”などは、数量に関わってはいるが、もともとそれ自身が数量の多寡を表すわけではない。“相当”はもとは“相当+（的/之）+名詞”の形で「(Xに) ふさわしいN」のような意味を表したものが、“有+相当+（的）+名詞”、“有+相当+形容詞+的+名詞”の形式を経て副詞化するという、形容詞が連用修飾に用いられることで副詞化するという一般的な文法化の過程とは異なるルートで副詞用法が生まれたとされる（雷冬平 2018）。“十分”は「十等分する」の意から、その十等分の全部（十割）を表すようになり、「量が多い」の意味が派生した（卢惠惠 2005）。いずれも、もとの動詞用法では数量の多寡を表さないが、数量が多いことを表す意味が派生したことで、そこからさらに程度的意味が生まれており、量的意味が程度的意味に結び付いたものとして挙げることができる。

5-3 大きさ、小ささ

現代中国語の程度副詞のなかには、大きさ、小ささを表すことから程度的意味が生じたものがある。高程度を表すものでは“太”が挙げられる。叶玉英 2009 は、甲骨文においてすでに“大”という字には「大きい」意の形容詞用法と“程度深 [程度が高い]”を表す程度副詞用法があり、後者が“过甚 [過大である]”の意へと発展して新しい程度副詞“太”が生まれたとする。

低程度を表すものでは“稍”、“微”、“略”がある。张谊生・潘晓军 2007 によれば、“稍”は「穀物（“禾”）の末端」を表し、一時期、低程度を表す場合と高程度を表す場合の両方に用いられた。低程度のほうは「次第に小さくなっていく部分」の意から“小”、“少”を表す形容詞用法が生じるというルートで、高程度のほうは「末端」の意から“尽”の意が派生するというルートで、それぞれ意味拡張が起こったが、高程度の用法は“很”、“非常”に取って代われ消失した。また、“微”は本義の“隐藏 [隠れる、隠す]”から“细小 [小さい、かすかである]”を表す形容詞を経て、そして、“略”は“疆界, 地域 [境界、地域]”を指す名詞から“面积少 [面積が小さい]”を表す形容詞を経て、それぞれ程度副詞になったとされる（张谊生・潘晓军 2007）。

これらは、体積・面積の大小が程度的意味につながったものとして挙げることができる。なお、消失したとされる“稍”の高程度の用法は、5-1 で挙げた「四つの意味特徴の傾向」の（4）に該当する。

5-4 とりたて性・目立ち性

他のもののなかからひとつをとりたてる、他とは異なることを示すことが、程度性につながったものがある。“特别”、“挺”などである。

“特别”については、“特”が古くはオスの牛、種牛を表す名詞であり、李宜蔓 2022 の分析によれば、これが [+高大] [+杰出] という意味特徴をもつために形容詞用法を獲得し、さらに [+高大] [+独一] の 2 つの意義素が顕著になることによって [+杰出] と [+独一] の 2 つの語義クラスが生まれた。また、“挺”は「抜く」意から“直 [まっすぐである]”、“挺拔 [まっすぐにそびえているさま]”、“突出, 杰出 [際立っている、傑出している]”という形容詞義へと派生し、それが程度的意味につながったとされる（刘晓凡

2008、刘心欣2022)。

これらはとりたて性・目立ち性による他との区別に由来して程度的意味が生まれたものである。“非常”、“异常”、“格外”なども、通常とは異なるという点で目立ち性を有していると考えられるため、同じ類型にまとめておく。

5-5 比較

前節の「とりたて性・目立ち性」に関連するが、分けて考えるべきものに、「比較」がある。“比较”、“较比”、“较”など（以下、“比较”とする）が挙げられる。鳴海2013、2015は「形容詞・形容動詞の中でも程度的意味へと転化しやすい意味として、「とりたて性・比較性」「異常さ」「感情」に関わる意味をまとめて考察する余地がありそうである」（鳴海2013:109、2015:315）と述べているが、この「比較性」は、「とりたて性」の背景として存在する他との比較を指すとみられる。一方、“挺”や“特別”が比較を背景にもちつつも、性質状態の際立ちに着目し、形容詞用法を経て副詞化しているのに対し、“比较”は「比べる」という動詞から形容詞用法をもたずに副詞化しており、文字通り、事物の性状を述べるのに比較を通してしていることを示すものである。比較した結果としての性状のありようには無頓着という点で、「とりたて性・目立ち性」の程度副詞とは様相を異にする。

現代中国語の程度副詞“比较”には、文脈から比較基準が読み取れる場合と読み取れない場合とがあり⁽¹⁵⁾、後者の場合、形式的に比較基準を設定し、「それと比べるなら」と条件を付けたうえで評価を述べる機能をもつことを、拙稿（前田2013）で述べた。“比较”は「Aである」という評価が比較を経たものであることを示しつつ、しかし比較基準は明示しないために、無条件に「Aである」とは言い切れない場合において、「他と比べるなら」と但し書きをつけて断定的な判定を避けることができる。“比较”は、「Aである」という判断に至った根拠として、比較を通してであることを示すために用いられるといえる。ゆえに、“比较”が表す程度は高程度でも低程度でもなく、「一定の程度」と解釈されることが多い。

5-6 前提や予想との相違

“比较”と同じく比較に用いられるが、比較基準が必ず明示される、または文脈上読みとれるものに、“更”がある。“更”は程度が深まることを表すとされるが、“更A”には「(Yもレベルが高いが) Xは〈さらに〉Aである」と解釈される場合と、下記のように〈さらに〉とは解釈できない場合とがある。(5)では、Y(彼の話す状況)のレベルが低いことが文脈上示されており、「X(張さんの話す状況)のほうが〈さらに〉Aである」とはいえない。

(5) 他把话说得太大，一点都不真实，老张谈的情况比他谈的更说明问题。 （前田2010:131）

〔彼は話を大きくしすぎて少しも真実を反映していない。張さんの話す状況のほうが彼の話す状況より問題をうまく説明している。〕

“更”は、“更改、改变 [かえる、かわる]”“替换、交替 [取り替える、交代する]”を表す動詞から副詞化したものであり、副詞“更”が担うのは、文脈や一般的な通念によって前提となっている「YはAである」という認識を変更する役割である。程度副詞“更”を用いた場合の「(XはYより)〈さらに〉Aである」という含意は、動詞“更”の「かわる、かえる」という原義と、「もとからAである」という状況との組み合わせによって語用論的に生じたものであると考えられる（前田2010）。

同様に、副詞“还”も「もどる、もどす」を表す動詞から副詞化したものであり、“比字句”（“比”を用いる明示的比較構文）に用いられ高程度を表す場合（X比Y还A）と、低程度を表す場合（X还A）があるほか、“他还在睡觉 [彼はまだ寝ている]”のような「時間的継続」を表す用法や、“亏你还上过大学呢 [よく大学に通ったことがあるなんて言えたものだ]”のような「意外性」を表す用法ももつ副詞である。このような多様

な用法に共通するのは、動詞“还”に由来する「事態の傾きに反した現状回帰」であり、前田2007では“还”の機能を「事態の傾きと事実とを照合した結果、その照合の軌跡が事態の傾きに反して原状態へと回帰することを表す」(前田2007:259)と定義した。

“更”は前提となる認識を改めることを通して、また、“还”は観察される事実が事態の傾きに反していることを述べることで、それぞれ程度的意味が生じているのであり、いずれも程度副詞のみで一意的に高程度や低程度を表すわけではない。これらの副詞は、どのような心的プロセスを伴って「Aである」という判定が導かれたかということを示すものであると考えられる。

5-7 まとめ

5-2から5-6でみたように、現代中国語の主な程度副詞には、程度副詞になりやすい四つの意味特徴(5-1)のほかに、数量の多寡や事物の大小を程度性になぞらえる、目立つものや異常なものに注目する、といったタイプのものと、“比较”、“更”、“还”のように、副詞の意味特徴が性状のありかたに直接には関係しないものがある。言い換えれば、前者は性質状態のありようを別のものととらえようとし、後者は性質状態をそれと判断するための手順やプロセスを述べることで、程度的意味の発現につながっている。

6. おわりに

程度副詞をはじめとした程度表現の研究、とりわけ中国における研究では、多くの場合において“程度量”という語が用いられ、より抽象度の高い程度という概念を、量になぞらえて把握しようとしていることがわかる。“程度是指某个量处于相应级次序列中的某一层级，是量的层级表现(程度とは、ある量が対応する段階性序列のなかのあるレベルにあることを指すものであり、量を階層的に表すものである)”(陶瑗丽2012:10)、“程度范畴与数量范畴是并列关系的两个范畴(程度範疇と数量範疇は並列する二つの範疇である)”(蔡丽2012:34)などの記述からも、程度範疇を数量範疇の下位カテゴリとみなすか並列するカテゴリとみなすかという点で意見は分かれるが、程度と量が近接するものであることをうかがうことができる。確かに、量と同様に、程度には段階性(gradability)がある。しかしその一方で、程度というものを程度副詞などの形式を用いて言語化しようとした際に、その段階性が再現されるかという点については、疑問の余地がある。本稿で扱った“比较”、“更”、“还”のように、表す程度性がどれほどなのかがコンテキストの支えなしには明確に定義できないものが多く、また、すべての程度副詞を程度という一本のスケール上に配置することは難しい。第3節で述べたように、本稿が「程度的意味」という用語を使用するのは鳴海2013、2015に倣ったものであるが、その背景には、程度副詞と呼ばれる語が、程度の高低そのものを直接的に表すのではないという考え方がある。

本稿はこのような問題意識から、“程度量”とは異なる別の観点から程度副詞の考察を行なった。現代中国語には本稿で扱ったもの以外にも多くの程度副詞があり、本稿で類型を試みたものはごく一部であるが、事物に何らかの性状を認める際に、他の何かになぞらえてとらえようとするものと、認知するプロセスを述べるものという大まかな枠組みを見出すことができた。これに照らして他の程度副詞を考察することで、副詞における程度的意味の発生のメカニズムの全容をつかむことができ、そして、程度補語などその他の程度範疇の形式化についても類型化を行なうことで、それぞれの形式の特徴を記述することができると思われる。

附記

本研究はJSPS科研費JP21K12983の助成を受けたものである。

注

- (1) 宋代語録における副詞の使用例を調査した竹田2012は、低い程度を示す「弱度副詞」は「上古、中古から引き継いだものが多い」(竹田2012:73)とし、“粗”、“略略”、“略”、“颇”、“稍”、“稍稍”、“稍自”“少”、

- “少少”、“微”、“有些”の11種類を挙げている。「弱度副詞」は「高度副詞」(29種類)よりも種類が少なく、また、“略略”、“略”、“稍”、“稍稍”、“微”、“有些”などの現代中国語でも程度副詞として用いる語が多く含まれている。
- (2) “程度副詞放在形容词或动词前充当状语表示程度，是现代汉语程度范畴中最常见的表现形式之一”(蔡丽 2012:42)
- (3) 林建法・林源主编、辽宁人民出版社。以下同。
- (4) 日本文藝家協会編、徳間書店。以下同。
- (5) [日常対話(脚本)]、[ニュース]、[政治評論]、[準備されたトーク(トークショー)]における程度副詞の使用頻度を調査した李宇凤2007の調査結果においても、“很”の使用頻度が特に高いことがわかる(調査対象は“太、特別、非常、很、挺、不大、有点;最、更、比较、还、稍微”)。ただし、[日常対話(脚本)]と[ニュース]とにおいては“很”の頻度がやや下がり、“太”と“最”の使用頻度がそれぞれ最も高くなっている。马清华等 2023はこれについて、[ニュース]では宣伝性と誘導性が重視されるという業種上の特徴が関連していると述べている(马清华等 2023:311)。
- (6) “最后[さいご]”、“最近[さいきん]”、“最终[さいしゅう]”などの一語化したものは除外。
- (7) “比”を用いる明示的比較構文に共起するもの(“X比Y还W”)と、それ以外のもの(“X还W”)、両方を含む。
- (8) 日本語の程度副詞に程度性と評価性の二面性があるという点は、工藤 1982 [2016]をはじめ、その流れを汲むと思われる渡辺 1990、仁田 2002などの論考からもうかがえる。
- (9) “形容词的副词化是人类语言中最普遍的副词化现象”(曹春静 2022:33)
- (10) “最”について、赵军 2009は“取敌首级(人头)[敵の首級をあげる]”意の動詞を本義とするが、栗学英 2011は先秦・中古の文献にそのような動詞用法の例が見られないことを根拠として、“最”の本義をたどることはできなとしつつも、“最”は中古漢語においてすでに、“上等、首位”を表す名詞から専ら最上級を表す副詞に文法化していると述べている。
- (11) “(1)表示“坏”(坏、可怕)的词语容易演变为程度副词”、“(2)表示“好”的词语也较易演化为程度副词”、“(3)表示强度、密度等高的词语也较易演化为程度副词”、“(4)带有终点、端点或最高点语义的词语容易演化为程度副词”(曹春静 2022:36-37)
- (12) 汪航・葛平平 2024は、現代中国語の程度副詞“很”は、語彙的には漢語由来、統語的にはモンゴル語由来であり、もとは動詞・形容詞用法であった“很”が程度副詞として定着したことは、元代の北方漢語とモンゴル語の言語接触の結果であるとの見解を示している。モンゴル語との接触については太田 1958 [2013]にも指摘が見える。
- (13) “极度副词“极”的产生与“最”有共同之处：都是由名词“最高位/点”虚化而来的”(栗学英 2011:13)
- (14) 赵志强・陈满华 2019を参照。
- (15) ゆえに、先行研究のなかには、“比较”を“比较1”と“比较2”の二つに分け、相対的程度副詞と絶対的程度副詞の両方に分類するものもある(吕文杰・张青岭 2018など)。

参考文献

(中国語)

- 蔡丽 (2012) 《程度范畴及其在补语系统中的句法实现》，世界图书出版公司
- 曹春静 (2022) 「程度副词演变的跨语言的语言研究」《汉语与汉语教学研究》第13号，pp.30-39，東方書店
- 黄荷 (2012) 「很与狠」《文学界(理论版)》第4期，p.74,76
- 季薇 (2011) 《现代汉语程度副词研究》，光明日报出版社
- 雷冬平 (2018) 「程度副词“相当”形成的特殊路径」《汉语学习》第3期，pp.66-73
- 栗学英 (2011) 「中古汉语极度副词的考察分析」《燕山大学学报(哲学社会科学版)》第12卷第1期，pp.11-15

- 李宜蔓 (2022) 「“特”与“雄”的语义演变与语法化过程对比研究」《汉字文化》第17期, pp.46-51
- 李宇凤 (2007) 「程度副词句法语用特点的调查研究—兼论程度副词量性特征与其句法语用特征的对应」《汉语学习》第2期, pp.36-49
- 刘晓凡 (2008) 「程度副词“挺”的语法化」《现代语文》第10辑, pp.26-27
- 刘心欣 (2022) 「“挺”的历时演变」《汉字文化》第5期, pp.43-48,59
- 刘振平 (2023) 《形容词》, 北京语言大学出版社
- 卢惠惠 (2005) 「近代汉语程度副词“十分”的语法化及其特殊用法」《语言研究》第2期, pp.37-39
- 吕文杰·张青岭 (2018) 《现代汉语程度表达方式研究》, 吉林人民出版社
- 沈家煊 (1995) 「“有界”与“无界”」《中国语文》第5期, pp.367-380
- 陶媛丽 (2012) 《现代汉语程度范畴研究》, 湖南人民出版社
- 汪航·葛平平 (2024) 「现代汉语程度副词“很”的来源及演变」《语言研究》第44卷第3期, pp.38-50
- 王静 (2003) 「“很”的语法化过程」《淮阴师范学院学报 (哲学社会科学版)》第25卷, pp.557-560
- 武振玉 (2004a) 「程度副词“好”的产生与发展」《吉林大学社会科学学报》第2期, pp.59-63
- 武振玉 (2004b) 「程度副词“非常、异常”的产生与发展」《古汉语研究》第2期, pp.67-71
- 叶玉英 (2009) 「论程度副词 {太} 出现的时代及其与“太”、“大”、“泰”的关系」《福建师范大学学报 (哲学社会科学版)》第3期, pp.127-131,150
- 张国宪 (2006) 《现代汉语形容词功能与认知研究》, 商务印书馆
- 张谊生·潘晓军 (2007) 「“稍微”类副词的历时来源和发展演变」《忻州师范学院学报》第23卷第3期, pp.55-60
- 赵军 (2005) 「程度副词“顶”的形成与分化」《云南师范大学学报》第2期, pp.24-30
- 赵军 (2009) 「“最”类极性程度副词的形成和发展」《宁夏大学学报 (人文社会科学版)》第31卷第4期, pp.14-21
- 赵志强·陈满华 (2019) 「“够”的情态义及构式化研究」《新疆大学学报 (哲学·人文社会科学版)》第47卷第3期, pp.128-133
- 朱德熙 (1956) 「汉语形容词研究」《语言研究》1, pp.83-111
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》, 商务印书馆
- (日本語)
- 太田辰夫 (1958) (2013) 『中国語歴史文法』, 朋友書店
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』, pp.176-198, 明治書院 [再録: 工藤浩 2016『副詞と文』, ひつじ書房, pp.99-121]
- 時衛国 (2009) 『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』, 風間書房
- 時衛国 (2011) 『中国語の程度表現の体系的研究』, 白帝社
- 竹田治美 (2012) 『宋代語録における副詞の研究』, 白帝社
- 鳴海伸一 (2013) 「副詞における程度の意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』6, pp.93-110
- 鳴海伸一 (2015) 『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』, ひつじ書房
- 仁田義雄 (2002) 『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』, くろしお出版
- 前田真砂美 (2007) 「副詞“还”の認知的意味分析」『中国語学』254号, pp.241-262, 日本中国語学会
- 前田真砂美 (2010) 「副詞“更”の意味—〈さらに〉の含意をめぐって」『中国語学』257号, pp.127-146, 日本中国語学会
- 前田真砂美 (2013) 「程度副詞“比较”の〈相对性〉」『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』, pp.451-473, 白帝社
- 渡辺実 (1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23, pp.1-16